

(別紙様式3)

令和4年3月31日

## 事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1  
管理機関名 国立大学法人大阪教育大学  
代表者名 学長 栗林 澄夫

令和3年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

### 記

1 事業の実施期間

令和3年4月1日（契約締結日）～ 令和4年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 大阪教育大学附属高等学校平野校舎  
学校長名 広谷 博史

3 構想名 Society5.0に向かう生徒と教員のための「学びの共同体」の構築

4 構想の概要

本構想では、Society 5.0で求められる力を基盤として、データサイエンスに基づいてSDGsの課題を理解し、その解決に向けてイノベーティブに思考し、主体的に実践できるグローバル人材育成システムを開発する。そこで、拠点校と共同実施校では、「データサイエンス基礎」等の科目を新設する一方、カリキュラムの中心となる「グローバル探究」では、SDGsの中で両校が異なる目標を設定し、国内外の協働大学・協働機関とともに開発する新たなプログラムや既存科目との有機的連携により、生徒の資質・能力等の育成を目指す。さらに、これまでの両校の教育研究の実績を活かしたアプローチの違いによる教育効果を、データサイエンスを活用し検証する。連携校の生徒が高校生国際会議を含む各種プログラムに参加するとともに、教員も教員国際会議や指導法や評価に関する研修へ参加することで、生徒と教員のための「学びの共同体」の構築を目指す。

5 教育課程の特例の活用の有無 有

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目		実施期間（令和3年4月1日～令和4年3月31日）											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
実施体制の整備	a 研究開発・実践に取り組む体制整備状況	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	b 情報共有体制の整備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	c 管理機関の長および拠点校校長の役割				○						○		○
	d 運営指導委員会・検証委員会						○				○		○
	e 卒業生の卒業後の進路追跡												
	f 留学生支援							○	○	○	○	○	○
	g 授業改善や教職員や生徒の意識改革を促した状況		○			○			○			○	○
	h アジア高校生架け橋プロジェクト								○	○	○	○	○
財政等支援	a 計画より上乗せした経費												
	b 研修やセミナー									○	○	○	○
	c 継続的実施のための計画												
ITネットワークの形成	a 運営組織の実績				○								○
	b 情報共有体制の整備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	c 進学や留学等の促進				○								
	d 事務局設置・人材配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	e 国際会議開催準備状況		○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	f 事業成果の社会普及								○				
	g 構想目的達成のための計画・情報収集・提供	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(2) 実績の説明

**a【実施体制の整備】研究開発・実践に取り組む体制整備状況**

**【AL（アドバンスト・ラーニング）ネットワーク運営会議】**

管理機関において「大阪教育大学アドバンスト・ラーニング・ネットワーク運営会議設置要項」を令和2年度に制定した。運営会議は、大学、附属学校、連携校および協働機関から組織されており、事業の円滑な実施に資すること及びイノベティブなグローバル人材を育成することを目指した組織である。事業の趣旨に基づき、国内外の機関と協働し、高校生に高度な学びを提供する仕組みであるALネットワーク（学びの共同体）の形成を目的としている。

令和3年度は、ウェブ会議システムを活用し、オンライン形式で7月と3月に会議を実施した。事業の取組状況や高校生国際会議について共有したほか、意見交換を行った。

また、専門的な視点から事業の運営等にかかる指導・助言をしていただく「運営指導委員会」および事業の効果検証を目的とした「事業検証委員会」を設置している。いずれもオンライン形式で、前者は2回、後者は1回実施した。

**【GIER（グローバル・イノベーション・エデュケーション・リサーチ）委員会】**

上記の会議のほか、「大阪教育大学グローバル・イノベーション・エデュケーション・リサーチ委員会設置要項」を制定し、管理機関にGIER（Global Innovation Education Research）委員会を設置した。

委員長（附属学校連携担当学長補佐）はじめ、計20名（昨年度より5名増）の大学教員及び附属学校教員が協働して事業の遂行に当たった。令和3年度は、計4回のオンライン会議を実施し

たほか、Microsoft Teams を活用した情報共有によって、事業を円滑に推進させるべく調整を図った。

連携校とは、事務局を拠点として随時メール等で連絡調整を行うことで、支障なく事業が展開できるよう配慮した。

#### **b【実施体制の整備】情報共有体制**

本事業を推進するにあたり、国内連携校や協働機関とは管理機関に設置する事務局を拠点として、各機関の担当者と電子メールや電話連絡により情報共有を行った。海外連携校とは、事務局と海外交流アドバイザーが連携し、海外交流アドバイザーを通じて情報共有している。

また、高校生国際会議では、参加する連携校担当者とオンラインで担当者打合せ会議を開催したほか、事業全体に関する連携校からの意見や要望を確認するため、3月3日に連携校担当者懇談会を開催する等、情報共有に努めた。

#### **c【実施体制の整備】管理機関の長および拠点校校長の役割**

管理機関の長である学長、拠点校・共同実施校の校長は、ALネットワーク運営会議の議長および副議長を務めた。ALネットワーク運営会議開催準備にあたり、管理機関内のGIER委員会委員長および研究担当理事・副学長との打合せ、意見交換の機会を持ち、構想内容の水準を維持し、必要な改善を図るよう努めた。構想内容を実現するために必要な資金を調達し、その有効な活用についての助言等を行った。

#### **d【実施体制の整備】運営指導委員会・検証委員会**

##### **【運営指導委員会】**

本事業を実施するにあたり、専門的見地からの指導・助言にあたる「運営指導委員会」を設置した。当該委員会は、本学の和田良彦副学長を委員長とし、元大阪府立北野高等学校校長の恩知忠司氏、東京大学大学院情報学環特任助教の城戸楓氏、立命館大学大学院教職研究科准教授の田中博氏、大阪府教育庁教育振興室高等学校課参事の萩原英治氏、藤岡金属株式会社代表取締役社長の藤岡ゆか氏、宝塚大学学長の米川英樹氏の6名の委員で構成されている。

今年度は、9月21日に第1回、高校生国際会議2日目である1月23日に第2回を、いずれもウェブ会議システムを活用したオンライン形式で実施した。

第1回では令和3年度の事業進捗状況の報告、質疑応答および指導、第2回では、委員長以外はオンライン上ではあるが、高校生国際会議を視聴いただいた上で実施し、令和3年度の事業進捗状況の報告及び質疑応答、事業内容に関する意見交換と指導・助言を受けた。主な内容は以下の通りである。

##### **<運営指導委員会における主な意見>**

- イノベティブなグローバル人材を育成する理由には、高校生がグローバルコミュニティの一員となること、日本の国際競争力を高めることがあり、どちらかにより内容や進め方が変わると想像する。
- 事業の取組を通じてどういう力をつけ、どういう分野でどういう活躍をしているか関心があり、卒業後のアンケート調査等で把握することができればよい。
- 一部の生徒だけでなく学校全体として取り組み広がりを持つこと、リーディングスクールとして事業目的へどのようにアプローチするかという深さを考えることが必要である。
- 評価指標において、本学の各校舎にそれぞれ特徴があるのか、生徒の成長面でペーパーテストの成績との相関や因果関係、相乗効果があるのか等の報告があればよい。
- 事業で目指すべきもの、測るべきもの等について、客観的なデータとして出せるとよい。
- 高校生が社会に出たときを見据え、対面とオンラインの両方からの理想的な教育について考えておくべきである。

##### **【事業検証委員会】**

本事業の実施状況を検証するための組織として「事業検証委員会」を設置した。当該委員会は、一般財団法人大学教育質保証・評価センター監事の稲垣卓氏を委員長とし、大阪府教育センターカリキュラム開発部長の植木信博氏、関西学院大学高等教育推進センター准教授の時任隼平氏の3名で構成されている。

今年度は、3月15日にウェブ会議システムを活用したオンライン形式で実施した。事業概要についての説明及びアセスメントグループの活動報告の後、質疑応答及び意見交換を実施した。資料及び総括は以下の通りである。

#### <検証のための資料>

令和3年度における事業の取組（拠点校・共同実施校、アセスメント、大学・企業との連携、附属高等学校と大学との連携授業、高校生国際会議・教員国際会議）

#### <事業検証委員会における総括>

- 事業2年目となる令和3年度年度の事業は、ほぼすべての事業が「事業実施計画」に沿って概ね予定通りに実施され、全体として概ね目標どおりの成果をあげている。
- 実施できなかった海外研修等についても、代替プログラムの実施によって、概ね当初計画に見合う成果をあげることができている。
- 事業2年目の大きな取組となった「高校生国際会議」は1月に開催され、その充実した内容と規模は、本事業が着実な成果を挙げていることをうかがわせるものとして高く評価できる。
- 学習成果のアセスメントについては、評価データの集積が着実に進められ、新たな評価指標の開発にも一定の進展があった。今後、これらを用いた的確な学習成果の把握が進められることを期待したい。
- ALネットワーク運営会議、GIER委員会及び運営指導委員会は、「事業実施計画」に沿って開催されており、事業全体の進捗状況を共有しつつ、それぞれネットワーク管理、進捗管理、指導助言の場としての的確かつ有効に機能している。
- 事業3年目は、事業の最終目標である「コンソーシアムの構築」に向けて、教育プログラムの普及と実施校の拡大に繋がるさらなる取り組みに期待したい。

#### **e【実施体制の整備】卒業生の卒業後の進路追跡**

事業を円滑に進めるため、令和2年度に管理機関内に「GIER委員会」を設置し、GIER委員会内にワーキンググループとして、評価にかかわる組織（大阪教育大学アセスメントグループ）を設置した。アセスメントグループは、拠点校であり一昨年度までSGH指定校であった平野校舎のこれまでの評価検証にも関与してきた実績があり、関連する過去6年分のデータも蓄積されている。今年度から新たな指標の開発も同時並行で進めているが、経年変化を比較検討する準備は整っている。

事業対象の学年が2年生であり、来年度3年生となるため、事業対象前のデータ取得のため、今後拠点校・共同実施校で今年度卒業のフォローを実施予定である。なお、進路先等のデータは取得済みであり、今後、高校での学修成果と大学との関連調査のアンケートを作成・実施予定である。

#### **f【実施体制の整備】留学生支援**

拠点校におけるアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生受け入れについて、拠点校と連携して授業や学校行事等への参加のための環境整備（個別学習時の教材やPC提供）を行うとともに、終了時には修了書を発行した。

#### **g（該当する場合）【実施体制の整備】授業改善や教職員や生徒の意識改革を促した状況**

拠点校では、本学教員の指導・助言のもと教員研修（年間4～5回）を行っている。昨年度は「探究的に学ぶ力」を評価するコモンルーブリックを作成し、本年度はそれを「グローバル探究Ⅰ・Ⅱ」及び「各教科」の探究活動の実践と評価に活用（ローカライズ）する研究を行い、地歴公民科、保健体育科の実践を「平野五校園共同研究発表会」（11月6日）及び「大阪教育大学附属学

校と大学教員の研究交流会」（3月7日）で発表した。来年度以降も継続する予定である。

また、附属平野地区の五校園（幼・小・中・高・特支）とも共同研究を進め、令和5年まで異校種をつなぐ探究学習とその評価について研究する。

「グローバル探究」の実践について、全国の教育関係者を対象とした「課題研究研修会」を開催し、発表と意見交換を行った（11月6日、41名が参加）。

共同実施校では、全教員を対象に大阪教育大学の仲矢史雄教授が「評価指針の開発～非認知能力を高める学び（探究）の実践～」と題したワークショップを11月20日に実施した。このワークショップにはオンラインで学外から43名が参加した。

## **h（該当する場合）【実施体制の整備】アジア高校生架け橋プロジェクト**

フィリピン及びマレーシアの留学生各1名、計2名を受入れた（10月18日～3月12日）。

### **a【財政等支援】計画より上乗せした経費**

該当なし

### **b【財政等支援】研修やセミナー**

- ・課題研究の評価に関する研修（12月8日 オンライン開催） 向井大喜特任講師  
近畿附属学校6校、教員12名
- ・課題研究の評価に関する意見交換会（3月2日 オンライン開催）連携校の教員対象
- ・本学WWLの取組説明（11月6日 オンライン開催）全国の学校関係者対象
- ・教員国際会議（1月30日～2月28日 オンデマンド）

### **c【財政等支援】契約終了後に継続するための計画**

本事業は、拠点校・共同実施校における事業と、管理機関である大学を含めた、特に連携校・機関とのネットワーク形成とその活用である。拠点校・共同実施校における活動については、寄附金と生徒負担での調整を行い、効果検証の結果を踏まえ影響を最小限にとどめる予定である。また、他校・他機関との連携については、本事業の成果に基づき、連携を大学の教育・研究に組み込むことで、大学として連携を維持管理していく予定である。

本学は既にクラウドファンディングに2件成功している。本事業についても3年間の成果に基づき、目的を絞ってクラウドファンディングを実施する予定であり、クラウドファンディング推進のための規程が整備されている。本事業の成果に基づき、外部機関や保護者等からの寄附を募り、事業継続の支援を行う予定である。

最終年度である来年度についても、管理機関負担分は確保できており、事業終了後もある程度の確保は出来ている。これは、本事業の成果が、大学の授業「探究型学習の実践と研究」に反映されるなどしており、継続の必要性の理解が進んでいるものと考えている。一方、さらなる自己財源確保のための活動は、残念ながら新型コロナウイルス感染症の流行のため、外部との交渉が困難なため、進んでいないが、最終年度の来年度に確保の予定である。

### **a【ALネットワークの形成】ALネットワーク運営組織の実績**

ALネットワークの運営組織は管理機関である大阪教育大学で「アドバンスト・ラーニング・ネットワーク運営会議設置要項」を制定し、その委員として管理機関である大阪教育大学の学長（運営会議における議長を務める）、副学長（3名：うち1名は副議長を務める）、学長補佐（GIER委員会委員長）、事務局長、拠点校である附属高等学校平野校舎主任及び副校長、共同実施校である池田校舎副校長、学長指名職員（カリキュラムアドバイザー2名、教員養成課程長、教育協働学科長、高度教職開発系主任）、さらに、WWL事業の協働機関関係者として、大学関係2名、企業・団体等7名、連携校関係12名、計35名で構成されている。会議はオンラインで開催している。

第1回は、7月5日に開催し、令和3年度事業の取組について説明および報告を行い、高校生

国際会議準備の進捗状況を共有、教員国際会議についての予告を行った。また、今後実施予定の教員研修に関するアンケート調査の協力依頼を行った。また、高校生国際会議の参加校へは高校生による学校紹介ビデオの作成、協働機関へは、高校生へ向けたビデオメッセージの作成を依頼した。（4 協働機関、5 連携校に作成いただき大学 HP に掲載している。）

第 2 回は、3 月 2 日に開催し、令和 3 年度の事業報告および令和 4 年度の事業計画について説明および報告を行った。また、高校生国際会議の様子を記録したビデオを視聴したほか、意見交換の時間を設け、各高等学校における課題研究（探究的活動）の評価方法について話し合った。

<委員からの主な意見>

- ・高校生国際会議の高校生宣言は、今後様々な学習の場で活用することが可能である。
- ・オンライン活用が進み、オンラインだからこそできるという視点からの学びがあるのではないかな。

### **b【AL ネットワークの形成】情報共有体制と協働事業の開発**

令和 2 年度に引き続き、AL ネットワーク運営組織が本事業を円滑に実施し、連携を強化するため、関係機関の情報共有体制を整備した。具体的には、関係機関が参加する情報共有プラットフォームとして Cisco システム の Webex Teams を運用した。

また、新たな協働事業の開発としては、大阪大学数理・データ科学教育研究センターと共同実施校である池田校舎とが協働して、「データサイエンス」の高校生向けアドバンスの e-learning 開発事業を継続している。これは、高校生及び大学院生がともに協働してシステムを開発しながら学び合う新しいスタイルのプログラムである。作成された e-learning のコンテンツは、連携校の高校生に無償提供する計画で整備を進めている。

さらに、教科書会社である啓林館が進める探究学習支援するツール「スマートレクチャー」の開発に、教育現場からの意見提示や資料提供を行い協力し導入を進めた。探究学習を行う際に利便性が高い生徒間での情報交換や情報整理、また、教員による生徒のデータ収集や進捗管理が可能なものであり、令和 4 年度以降も学校現場で活用すべく検討している。

また、ハノイ大学とはハノイ大学生 30 名とオンラインで連携し、共同実施校の高校生が探究活動を協働して行うことが出来た。

### **c【AL ネットワークの形成】修了生のトップ大学等への進学，海外留学等の促進への寄与**

拠点校において、1 年生全員を対象に 7 月 16 日に、ベルリン自由大学博士課程の卒業生による講演を行った。自身の海外留学の経験や海外の大学での研究・諸活動について話をした。

共同実施校において、海外大学進学希望者向けに 9 月 8 日に説明会を実施した。卒業生 2 名（イギリス・ケンブリッジ大学在学学生、立命館大学在学中に交換留学を体験した社会人）が講師となり、生徒 16 名（3 年生 3 名、2 年生 1 名、1 年生 12 名）参加した。質問が多く大幅に時間を延長した。また、共同実施校の卒業生 14 名から、海外大学進学や留学についての相談に対する協力の申し出があり、希望者への支援体制が整いつつある。そのほか、保護者向けに(株)ISA の資料「グローバル進学ガイド」を提供した。

### **d【AL ネットワークの形成】事務局体制及びカリキュラム開発の人材配置**

AL ネットワーク運営組織として、管理機関に事務局を設置し、担当職員が文部科学省との連絡窓口としての役割を果たしている。また、拠点校・共同実施校をはじめとする各連携機関との連絡調整や情報共有、会議運営等を担当し、事業が円滑に推進できるよう務めた。

また、海外交流アドバイザーを拠点校及び共同実施校に配置し、必要な情報の収集や提供、海外連携校に対する連絡や案内等のほか連携交渉を行った。

また、拠点校および共同実施校における事務処理については、事務補佐員を配置することで支障なく業務を遂行できるようにした。

本事業のカリキュラムの開発については、管理機関である大阪教育大学及び国内協働大学である大阪大学及び大阪府立大学の教員が協働的に関わっている。

カリキュラム全体については、GIER 委員会のメンバーでもある大阪教育大学の教員 2 名がカリ

キュラムアドバイザーとして開発・助言を行っている。具体的には、拠点校・共同実施校の担当者  
と面談することで、課題を認識し改善を図っている。

## **e【AL ネットワークの形成】国際会議等の開催準備状況**

### **【高校生国際会議】**

高校生国際会議は、1月22日、23日に実施し、海外連携校3校、国内連携校9校が参加し、774  
人の参加申込があった。当初は、国内連携校は会場で対面参加、海外連携校はオンライン参加の  
ハイブリッド形式で実施する予定であったが、オンライン開催に変更した。

国内外の高校生が持続可能な開発目標（SDGs）に関する探究活動の成果について交流を深め、  
高校生として何ができるのか議論することを趣旨とし、全体テーマを「誰一人取り残さない世界  
をめざして」として開催し、高校生宣言を発信した。

1月22日はオープニングセレモニー、分科会を行い、1月23日はワークショップ、シンポジウ  
ム、クロージングセレモニーを行った。また、1月19日から1月31日までウェブ上でのポスタ  
ーセッションを行い、高校生だけでなく、近畿圏のアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生10  
名を含む多くの参加者から積極的にコメントが寄せられた。

当日の運営のサポートとして、管理機関である本学の教員および学生、協働実施大学である大  
阪大学の留学生が関わった。大学教員は、分科会およびシンポジウムのファシリテーターを担っ  
た。本学学生は学生サポーターとして、当日、分科会の英語等のサポートを行ったほか、拠点校  
・共同実施校の生徒が出展するポスターのチェックも行った。大阪大学の留学生は分科会および  
シンポジウムにおいて助言を行うとともに、3月14日に拠点校の生徒と振返りを行った。

5月28日に学内担当者打合せ、7月5日のAL ネットワーク運営会議では方向性を共有し、11月  
30日に連携校担当者説明会を開催した。また、3月3日に連携校担当者  
と振返りを  
行い、次年度  
の国際会議  
に向けて話  
し合う機会  
をもった。

## **f【AL ネットワークの形成】事業成果の社会普及の実施や計画**

全国の教育関係者を対象とした拠点校の「課題研究研修会」において、本学 WWL 事業の取組を  
発表した（11月6日）。また、拠点校の「グローバル探究Ⅰ、Ⅱ」の指導方法等について、日本  
教育新聞に記事が掲載された（8月9日）。また、河合塾より取材があり令和4年4月以降2回  
にわたって教育情報誌に連載される予定である。

共同実施校では「グローバル探究Ⅰ、Ⅱ」の目標や具体的な授業内容を随時公開するとともに、  
探究型授業での ICT 活用事例も紹介している。11月20日の池田地区合同研究会では「探究Ⅰ」  
の授業動画を公開し、研究協議を行った。

## **g【AL ネットワークの形成】円滑な運営のための情報収集・提供**

- ・11月6日に、拠点校の課題研究研修会において、全国の学校関係者を対象に本学WWL事業の  
取組説明をオンラインで行った。
- ・3月3日に、高等学校の WWL 事業担当者を対象に事業に対して自由に意見交換をする場とし  
て懇談会を開催し、高校生国際会議の振返りを行ったほか、次年度に向け意見交換を行った。

## **h（該当する場合）【AL ネットワークの形成】関係機関との協定文書等**

本事業の申請段階に、連携校および協働大学から AL ネットワーク参加にかかる同意書を得て  
いる。また、採択後は採択報告とともに、AL ネットワーク運営会議委員の委嘱手続きを行った。

## 7 研究開発の実績

### (1) 実施日程

業務項目 拠点校：拠 共同実施校：共 管：管理機関	実施期間（令和3年4月1日～令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
b データサイエンス基礎, データサイエンス	拠・共	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b アカデミック・ライティング	共		○				○					○
c グローバル探究Ⅰ	拠・共	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c グローバル探究Ⅱ	拠・共	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c グローバル探究英語	拠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c グローバル探究プラス English Salon	拠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c 海外連携校等とのワークショップ（台湾）	拠								○	○		
c 海外連携校等とのワークショップ（ネパール）	拠								○			
c 海外連携校等とのワークショップ（韓国）	共								○			
d タイ研修（代替プログラム）	拠											○
d カンボジア研修（代替プログラム）	拠						○	○	○			○
d ニュージーランド研修（代替プログラム）	拠											○
d カナダ研修（代替プログラム）	共											○
d シンガポール研修（代替プログラム）	共											○
e 生命の倫理	拠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
e イノベティブシンキング	拠・共	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
f 教科の指導と評価	拠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
g 先取り履修 大阪教育大学「教師にまっすぐ」	拠			○	○	○	○	○	○			
g 先取り履修 大阪大学「健康・医療イノベーション学」	拠								○	○	○	○
g 先取り履修 大阪大学「データサイエンス」	共						○	○	○			
h 高度な学びの環境整備	拠・共	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
i アジア高校生架け橋プロジェクト留学生受入	拠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
i 多文化理解講座	拠						○			○		
i Lunch Time Chat	拠・共							○	○	○		
j 課題研究教員研修会	拠								○			
j オンラインによるグローバルスタディ	拠							○			○	○
j 評価指針の開発研修	共								○			
j 近畿国立大学附属学校間ネットワーク	管									○		
j 大阪教育大学学部対象授業	管							○	○	○	○	

### (2) 実績の説明

#### a【研究開発・実践】設定したテーマ

##### 《拠点校》

SGH事業において「多面的に”いのち”を考えるグローバルリーダーの育成」をテーマに、「格差・貧困」「医療・保健」「防災・減災」に関わる探究的な学習等に取り組んできた。その成果を継承し、多様な文化や社会と様々な考え方を理解しながら、全ての人々が等しく豊かに生きる社会づくりの実現に向けて主体的に力を発揮する人材の育成を目指す。そこで、SDGsの中で「1 貧困をなくそう」, 「3 すべての人に健康と福祉を」に焦点を当てる。

##### 《共同実施校》

セーフティプロモーションスクールを目指して蓄積してきた個人、地域社会、国際社会の“安全”に関する学びの蓄積を活かし、Society5.0の創造に貢献できる人材を育成する。そのため、寛容性や主体性、協働性に裏付けられた＜グローバル市民力＞を涵養し、グローバルな社会課題を創造的に解決する意欲と能力を持った市民の育成を目指す。そこで、SDGsの中で「13 気候変動

に具体的な対策を」、「16 平和と公正をすべての人に」に焦点を当てる。

## b【研究開発・実践】協働で行ったカリキュラム開発

### (1) 「データサイエンス基礎」「データサイエンス」（拠点校・共同実施校）

#### ①新設科目「データサイエンス基礎」（第1学年全員対象 1単位）

授業は、大阪教育大学の教員2名と高校教員とのチームティーチングとした。高校教員は授業内容を他教員に伝え、学校設定科目「グローバル探究Ⅰ、Ⅱ」や「社会と情報」「数学Ⅰ、A」ほか各教科や大阪大学の授業「データサイエンス」との連携を担保した。

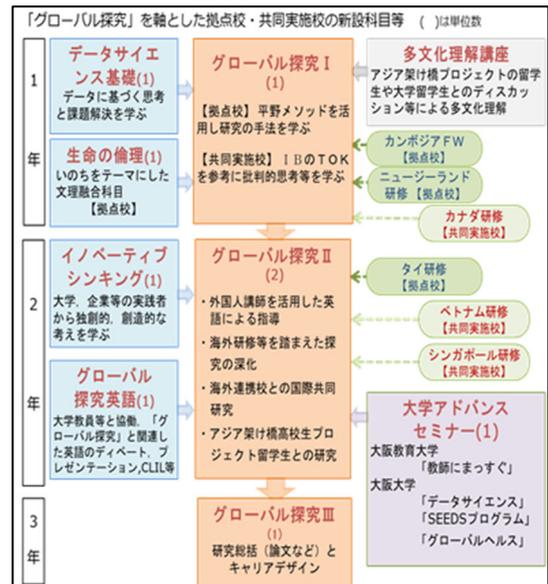
- ・授業の目標を以下(ア)～(ウ)の理解・習得とし、社会分野や科学分野、身の周りの内容も組み入れたカリキュラムとした。

(ア) 問題解決や仮説の構築を念頭とした統計とExcelによるデータ分析

(イ) 機械学習とデータ分析の理解を目的とするPythonによるプログラミング

(ウ) 身近にあるデータとAI(人工知能)への関心と、倫理的な知識

- ・授業の主な内容は「身近なデータサイエンス」「人工知能と機械学習」「ビッグデータ」「データの質と量」「Excelによる集計やグラフ、数値計算」「データを根拠とした意思決定や問題解決」「代表値と散布度、相関、連関、因果関係」「データ取得、活用の倫理、データの信頼性」「Pythonによるプログラミング」である。
- ・授業前後でのアンケート調査（統計学的知識・情報学的技能・問題解決に向けた流れ）の結果、全ての項目の平均値が向上し有意差が認められた（両側5%,  $p < .01$ ）。とりわけ、問題解決に向けた流れに関係する情報学的技能の向上が目立った結果となった。



#### ②「データサイエンス」（「大学アドバンスセミナー」の科目）

大阪大学数理・データ科学教育研究センターと共同実施校の教員が協働し、授業内容を検討・実施した。当初、データ関連人材育成プログラムを受講した博士人材や社会人による講義と実習を行う予定であったが、コロナ禍の影響で人材養成プログラムが計画通りに進まなかったため、大阪大学教授が本授業を担当した。

授業は9月～12月の土曜日に共同実施校のコンピュータ室で実施した（希望者10名が受講、全6回、各回3時間）。授業は前半を講義、後半を実習とし、Pythonを使用し、機械学習の仕組みなどAIの構造に直接触れる高度な内容であったが、丁寧な説明を受けて楽しく学んだ生徒が多かった。実施後に授業の録画を拠点校及び連携校に提供した。

### (2) 学校設定科目「グローバル探究英語」（拠点校：2年全員 1単位）

外国人講師及び（株）ヒューマンブレインと拠点校教員が協働し、アカデミック・ライティングやプレゼンテーション、ディベート等を組み入れた授業（1単位）を開発し、拠点校で実施した（後掲c(3)）。

### (3) 「アカデミック・ライティング」（共同実施校）

「グローバル探究Ⅰ」の中で大阪大学教授による授業「アカデミック・リーディング」を2回実施し、「グローバル探究Ⅱ」の中で同大学教授による授業「アカデミック・ライティング」を3回実施した（後掲c(1)(2)）。

### (4) オンラインによるグローバルスタディ（拠点校）

（株）とことこあーすと協働し、カンボジア、フィリピン、インド、ニュージーランド、オース

トラリアとつなぎ、国・地域の社会課題や取組を高校生が学んだ（年3回実施。後掲j(2)）。

### c【研究開発・実践】「グローバル探究」等の教科・科目を設定した状況等

#### (1) 学校設定科目「グローバル探究Ⅰ」（拠点校・共同実施校：1年全員 1単位）

##### 《拠点校》

- ・探究活動の指導法「平野メソッド」を活用しながら一連の研究手法を学ぶことを目標とし、1年120名を対象に5名の教員が担当した。生徒は4名程度の32班により、SDGsに関わる大阪・日本の社会課題について探究活動に取り組んだ。
- ・学習内容は次の通り。
  - [1 学期] 探究活動への導入、合意形成、多様性理解、課題の発見、QFT、情報収集・整理法、調査手法、
  - [2 学期] データ収集、データにもとづく論理的思考、三角ロジック、ミニマムリスト、フィールドワーク、
  - [3 学期] ポスター作成法、プレゼンテーションの手法、研究発表（校内）
- ・研究手法を学ぶ目標は達成できた。学校設定科目「データサイエンス基礎」と連携しアンケートやインタビューによる情報収集を学習したことにより、現地フィールドワーク及びオンラインでのインタビューやアンケートの件数が増加した。また、実験による検証を行うなど、調査研究の方法が多様になった。多くの文献での調査やデータ収集を行っている班が増加しているが、それらを踏まえた考察の過程を正しく表現する力の習得が今後の課題である。

##### 《共同実施校》

- ・1年160名を対象に、学年団を含む8名の教員が担当した。下記(ア)～(エ)を授業目標とし、授業内容は下記の通りである。
  - (ア) SDGsの学習をベースにして、多教科連携の横断的な学習や外部講師から、高校生としての探究的な「学び」をめざす。
  - (イ) ユネスコ国際教育の理念を意識し、人間の尊厳・平等・相互の尊重をベースにESDを中心テーマとした学習を行う。
  - (ウ) クリティカルな思考を通して身近なところから世界で起きている様々な諸問題に向かい、地域や世界の文化の違いや人としての普遍の精神を理解することによって、平和の文化を築こうとする資質を養う。
  - (エ) 身近な実社会で起こっている地域の諸問題について学習し、その総合的な理解と解決に向かう資質を養う。
    - [前期] 「ESD」「SDGs」とは何か、「生きることの意味を考える」、「知ることを探究する」ブックレポート報告会、SDGs関連テーマ学習（8種）
    - [後期] アカデミック・リーディング、仮説の立て方、情報の集め方、ディベート、研究倫理、リサーチクエスト、グループ探究活動、プレゼンテーション、振り返り、1年間のまとめ
- ・アカデミック・リーディング（9月3日、10日）は、大阪大学で初年度教育として実施されている講習を、探究活動を始める1年生向けにアレンジして「リーディング」に特化した内容で行った。1回目の講習後、各自が持ち寄った本を使ったワークなどの実践を交えながら読み方を詳しく学んだ。

#### (2) 学校設定科目「グローバル探究Ⅱ」（拠点校・共同実施校：2年全員 2単位）

##### 《拠点校》

- ・「グローバル探究Ⅰ」の学習を応用しながら、他者と協働し自主的に研究を進めることを目標とし、SDGsに関わるグローバルな社会課題についての探究活動に取り組む。2年120名を対象に6名の教員が担当した。
- ・32班が研究に取り組み、発表会（校内）で発表した。うち14班は、高校生国際会議においてポスター（日本語・英語）や口頭発表（英語）で発表した。この他、校外での発表は5件である。
- ・英語でのポスター作成・口頭発表については、大阪教育大学の院生や留学生、外国人講師と連携して指導した。また、高校生国際会議での研究発表した生徒15名が、事後学習として、国際

会議に参加した大阪大学の博士課程留学生 4 名から、それぞれの研究と発表に対する助言を受けるとともに、テーマに関わる発展的な意見交換を行い、知見を深めた。

- ・新型コロナウイルス感染症による海外連携校の学校閉鎖期間が長引き、海外の生徒との国際共同研究が実施できなかった。
- ・海外でのフィールドワークが出来ず、データ収集に困難さがあった。適切な情報収集の方法に関する指導が課題であり、来年度のカリキュラムに改善を加える。
- ・生徒の研究発表等の実績
  - (ア) ネパールのノーベルアカデミー高校の生徒と「自然災害と防災」をテーマに研究発表、共同学習を実施し、4 名が研究成果を発表した（大阪市立大学大学院理学研究科と連携、さくらサイエンスプログラム）。
  - (イ) 高校生・高専生科学技術チャレンジ（JSEC）で入選するとともに、論文が専門誌に掲載された。「ティータイムは健康をつくる ～カビの成長を抑制する飲み物成分の解明～」。
  - (ウ) WWL・SGH探究甲子園（関西学院大学）において、口頭発表 1 件「廃棄される衣服に新しい価値をみいだそう」、ラウンドテーブル 1 件「石油を燃料とする車を作り続けていくべきか」発表
  - (エ) 文科省・高校生フォーラムにおいて発表 1 件、「Gender-free education for young children」

#### 《共同実施校》

- ・2 年 163 名を対象に、学年団を含む 8 名の教員が担当した。下記(ア)～(エ)を授業目標とし、授業内容は下記の通りである。
  - (ア) 「グローバル探究 I」の学習をベースにして、多教科連携の横断的な学習や外部講師による講演から、高校生としてのより深い総合的な「学び」を目指す。
  - (イ) ～(エ) は「グローバル探究 I」と同じ
    - [前期] 「探究活動の進め方」、講演会（4 テーマ）、個人での探究活動、中間発表
    - [後期] 探究活動、国際会議に向けてグループ内発表、ポスター作成、ポスターセッション、アカデミック・ライティング、2 年間の振り返り
- ・アカデミック・ライティング（5 月 11 日）は、探究活動のテーマに関連する膨大な文献から必要な文献を抽出するワークで、本の題名や目次等から概要を把握し、相手に伝える活動を行った。また、「速読チャレンジ」として、600 字程度の新聞記事から必要情報（著者・題名・文献情報・内容）を 3 分で、また、構造（問い・答え・論拠）を 7 分間でメモし共有した。情報交換をしながら読むことの効果とどう読み取ったかが大切であることを学んだ。また、2 月 8 日に、パラグラフ・ライティングの構造と効果について講義を受けた後、各自の探究内容に関して「問いと答え」「トピックセンテンス」を書き出し、パラグラフ文を作成してペアワークで検証した。2 月 22 日は、いくつかのレポート例について、不十分な部分を探した後、ペアで検証した。不十分な点と改善方法を学習した。2 回の講義をもとに探究内容をまとめた個人レポートを再度自己点検し、推敲するように指導した。

#### (3) 学校設定科目「グローバル探究英語」（拠点校：2 年全員 1 単位）

年間を通して「アカデミックライティング・プレゼンテーション」及び「即興型英語ディベート」を授業に組み入れ、いずれも外国人講師と拠点校教員のチームティーチングにより実施した。

##### (ア) 「アカデミックライティング・プレゼンテーション」（年間 12 時間）

- ・パラグラフライティングに必要な基礎知識を習得できるように Topic sentence, supporting sentence, concluding sentence を順に学習する。
- ・「グラフの説明」「比較・対象」「問題と影響」「問題と原因」「問題と解決策」と目的に合わせたパラグラフの書き方とそれぞれの文の機能を学習する。事前に提示した Writing Rubric に従いネイティブスピーカーが採点した。
- ・アジア諸国に関するリサーチプレゼンテーション（5 枚のスライドを PowerPoint で作成し、100 秒で説明する）を演習として行う。

##### (イ) 「即興型英語ディベート」（年間 19 時間）

授業ごとに、社会問題や教育問題等を含むテーマを設定し、50分完結の即興型英語ディベートを13回実施した。

- ・毎時のディベートでは、拠点校教員と外国人講師等が、各チームの発言内容（構成・論理性・言語知識等）、表現力（声量、即興性、ボディランゲージ等）をルーブリックに従い採点し、評価・指導した。各チームの採点結果によると、年間のスキルはいずれのチームも向上し、特に中間層の英語力をもつ生徒の伸びが著しかった。
- ・生徒の事前事後の自己評価では、「時事問題、グローバル課題について英語で話せる」とする生徒の割合が31ポイント増加するなど、意見（英語）を述べることの自信を持つ生徒が増加し授業の成果が認められた。

#### (4) グローバル探究プラス「English Salon」（拠点校 希望者）

より意欲的に学ぶ生徒に対して週1回放課後の活動「グローバル探究プラス」を実施し、高校生国際会議の運営準備と「English Salon」を実施した。「English Salon」（6月～11月、14回）は、より高い英語活用力の習得を目的とし、拠点校教員、海外交流アドバイザー及び久保田賢一関西大学名誉教授（NPO法人 学習創造フォーラム）らが協働し、SDGsの各目標に関するディスカッションや研究発表（英語）をとおして生徒の英語活用力を高めた（毎回15名～30名が参加）。

#### (5) 海外連携校等とのワークショップ（拠点校、共同実施校）

##### ① 高雄師範大学及び同附属学校、大阪教育大学教職大学院院生とのワークショップ（拠点校）

11月～12月、小学校教育に関心を持つ生徒3名が、大阪教育大学教職大学院院生と協働し、高雄師範大学附属学校での授業（アバターを活用した多文化理解）の教材を作成した。授業はオンラインで本学教職大学院生が実施した。

##### ② ネパール・ノーベルアカデミー高校との共同学習（拠点校）（c(2)(ア)に掲載）

##### ③ 韓国・上黨（サンダン）高校とのオンライン交流（共同実施校）

12月14日、16日、17日（13時～16時）に実施し、各校16名ずつが参加した。事前交流として自己紹介動画の作成やプレゼント交換を行い、当日の交流は「平和の文化創造のための小さな一歩～相互理解に基づく未来の創造～」をテーマに互いの未来を考え、国を超えて学校同士あるいは高校生同士がどのように学び合えるか、また、互いにどのような文化を有しているかについて交流し合った。最終日には「真の理解へ向けた私たちの提案」について話し合い、共同宣言を作成した。

#### d【研究開発・実践】カリキュラムに位置づけられた海外研修等

新型コロナウイルス感染症の影響による海外研修の中止等に対して、下記プログラムを実施し、それぞれの目的を果たした。

##### (1) 「タイ研修」（拠点校） 2年全員（12月）→延期

- ・3月に時期を変更し、愛媛県・高知県において、環境保全、過疎化対策、官民による新しい起業等、SDGsに向けて積極的に取り組む行政・団体を訪れ研修することにしたが、感染症の影響で、令和4年度4月に再延期した。事前学習として、3月11日に愛媛県南予地域とオンラインで結び、現地のSDGsの取組について学習した（2年全員）。

##### (2) 「カンボジア研修」（拠点校） 1,2年希望者（8月）→中止

- ・女性や児童労働への支援を行う現地NPOやNGOに滞在して格差・貧困や教育について学び、課題研究にいかすことを目的とした本研修の学習を補完するため、訪問予定先の作業所や農村民家、学校等とオンラインでつなぎ、研修を4回実施した（1,2年155人、教員7人が参加）。生徒は、現地の課題や人々の社会生活について具体的に学ぶことができた。
- ・2年生対象 第1回（9月16日）、第2回（11月27日）  
課題研究のアクションプランづくりに資すること、日本と海外の社会生活の違いを理解することを目的として、女性の自立支援と労働解放に取り組むNGO（SALASUSU）の現地スタッフ2名と労働者の講義・インタビューにより、カンボジアの格差・貧困、教育、医療・健康に関する課

題と支援のあり方について学習した。

- ・1年生対象 第1回(10月8日), 第2回(2月11日)

次年度の課題研究のテーマ設定に資すること, 日本と海外の社会生活の違いを理解することを目的とし, 農村部で学校運営や貧困の解消, 循環型農業開発による雇用促進に取り組むNPO (Share the wind) の現地スタッフ2名と労働者による講義・インタビューにより, 格差・貧困, 教育を中心とした現地の社会課題について学習した。

### (3)「ニュージーランド研修」(拠点校) 1年希望者(3月)→中止

- ・多文化共生について学び, 海外連携校とSDGsへの取組について意見交換等を行うことを目的とした本研修の学習を補完するため, 現地の大学や学校とオンラインでつなぎ研修を2回実施した(1年生18人, 教員5名が参加)。研修を通し, 現地の社会課題と両国の文化・国民性の違い等に気づくとともに, 英語での意見交換に意欲的に取り組む生徒が増えた。
- ・第1回(3月10日)ニュージーランド・カンタベリー大学とつなぎ, 大学及び現地高校教員による講義とワークショップ
- ・第2回(3月16日)講義「SDGs設定のねらい」元国連アメリカ人職員(オンライン)
- ・「ニュージーランドの多文化共生社会と学校教育の現状と課題」をテーマに, 現地の教育関係者の講義, ワークショップ(解決に向けた意見交換とプレゼンテーション)を実施した。

### (4)「カナダ研修」「シンガポール研修」(共同実施校) 1,2年希望者(3月)→中止

- ・「SDGs×英語研修」を3月16日,17日(両日9時~14時30分)に共同実施校で行い, 生徒30名が参加した。(株)ISAによる運営企画のプログラムで, SDGsをテーマに海外ゲストスピーカーの話を聞き, 少人数のグループに分かれてネイティブの講師がファシリテーターとなって問題解決ワークにチャレンジした。デザイン思考的アプローチを使い, 実際の課題解決の現実やその取組を身近に感じることができた。

## e【研究開発・実践】文理融合型カリキュラム編成

### 《拠点校》

第1,2学年は, 地歴科, 公民科では「現代社会」「日本史」「世界史」の科目を全員が履修し, 理科では「物理」「化学」「生物」の科目を全員が履修するほか, 「数学Ⅲ」や理科の理系の学習内容を文系生徒も受講し, 地歴・公民の発展的な内容を理系生徒が受講する等, 全員がバランス良く学ぶ教育課程を編成している。

### 《共同実施校》

第1学年では, 全員が学習指導要領の必履修科目をバランス良く学び, 第2学年では, 地歴科, 公民科, 理科の合計6科目の中から3科目を選択履修するが, 理科の科目を必ず1科目または2科目選ぶよう指導しており, 地歴・公民と理科をバランス良く学んでいる。第3学年では, 多くの科目を自由に選択するが, 文系型の生徒には「精選物理」や「数学総合」など, 理系科目を選択履修するよう指導し, 理系型の生徒には地歴・公民の科目を1科目履修することを義務づけており, バランス良く学ぶ教育課程を編成している。

また, 学校設定科目「データサイエンス基礎」(b(1)参照), 「グローバル探究Ⅰ~Ⅲ」(c(1)参照), 「イノベーションシンキング」は, 文理融合した内容により構成された授業である。

### (1)学校設定科目「生命の倫理」(拠点校)(1年全員 1単位)

下記(ア)~(ウ)を目標とし, 拠点校の教員が担当した。

- (ア)「受精卵遺伝子の診断」「代理母」「脳死は人の死か」「臓器移植法」「尊厳死・安楽死」をテーマにあげ, それらに関する知識・理解を深める。
- (イ)論理的思考力, 情報収集分析力, 課題解決力, コミュニケーション力, セルフマネジメント力を高める。
- (ウ)「グローバル探究Ⅰ~Ⅲ」につなげる学習とする。

生命や人体，医療や保健制度，法律や倫理など，文・理の複数分野からの理解と判断が必要な上記テーマについて，1 学期は新聞記事を活用して，論題に潜む本質課題を理解した。2,3 学期はそれらの知識を活用してディベートを行い，課題をさらに深化させた。2 学期と 3 学期で肯定・否定の立場を入れ替え実施することで多面的理解や批判的思考を内面化することをねらうとともに，データに基づく理論展開を通して，情報収集力，データ整理力，コミュニケーション力の育成を図った。生徒の変容をルーブリックにより評価・分析した結果，(ア)，(イ)に関する知識・理解，資質・能力が高まっている。

## (2) 学校設定科目「イノベティブシンキング」

(拠点校：2 年全員、共同実施校：2 年選択者 1 単位)

論理的思考や批判的思考を育成する「グローバル探究」とは相補的役割を担う，創造的思考や統合的思考を育成する探究カリキュラムの構成と指導法を開発し，拠点校及び共同実施校で実施した。

拠点校では，データや AI の活用，アプリ開発等を学びながら，大阪教育大学の教員，(株)MIRAIing, Glocal Academy, 産総研 AI コンソーシアム，大阪商工会議所と連携した。各授業は，高校教員と上記大学・機関との協働で，主にワークショップ形式により実施した（「AR アプリと AR 地球儀を活用した新しい授業づくり」「食品ロス問題を解決するアプリ事業の提案」「産総研の ASKA 開発と活用事例」等）。AI コンソーシアムと連携して実施した ASKA 開発授業では，実際に意見共有プラットフォーム ASKA を使用したことで AI との親和性が増したとする回答が多く見られた一方で，ユーザーインターフェースの裏側で働いているアルゴリズムの実態を知ったことで AI への懐疑心が増したとする回答も見られるなど，賛否の分かれる話題に触れた生徒の反応には大きなインパクトが示されている。

## f【研究開発・実践】学習目的が構想目的達成に資するように工夫した取組

ルーブリックを用いた教科の指導と評価（拠点校）

昨年度，生徒の学習への取り組み方からまとめた「主体的な学びを評価するコモンルーブリック」を作成した。本年度はそれを教科でローカライズし，教科での探究的な学びの場面で活用し，全教科で授業実践している。そのうち地歴公民科，保健体育科の実践事例は，研究発表会（11 月 6 日）において全国の学校関係者に向けて発表するとともに，本学の「附属学校園教員と大学教員との研究交流会」で発表した（3 月 7 日）。

## g【研究開発・実践】高大連携による大学教育の先取り履修

学校設定科目「大学アドバンスセミナー」（拠点校，共同実施校 1 単位）

### (1) 「健康・医療イノベーション学」

大阪大学大学院医学系研究科国際未来医療学講座と連携し，大阪大学が開講する授業を拠点校の生徒 12 名が受講し，拠点校の単位を認定した。

### (2) 「教師にまっすぐ」

大阪教育大学が開講する授業を拠点校の生徒 8 名が受講し，大学の修了書とともに拠点校の単位を認定した。

### (3) 「データサイエンス」

HRAM/大阪大学数理・データ科学教育研究センターと連携した授業を開講し，共同実施校の生徒 10 名が受講した。将来の先取り履修の対象の検討も含め，データサイエンスの高大接続プログラムの開発を開始している（b(1)②掲載）。

## h【研究開発・実践】より高度の内容を学びたい高校生が学習できる環境整備

### (1) 大学との連携

大阪教育大学のグローバルセンターと連携し，「多文化理解講座」「Lunch Time Chat」「高校

生国際会議」等へ教員研修留学生を派遣する体制が整っている。また、「グローバル探究Ⅰ、Ⅱ」「イノベティブシンキング」の指導支援も得られている。

大阪大学高等教育・入試研究開発センター高大接続部門が、大阪大学でのアドバンスプログラムの一元的窓口となり、大阪教育大学と連携し、より高度の内容を学びたい高校生へ学習を提供している。また、外国人講師の派遣や「Lunch Time Chat」や「高校生国際会議」等への留学生の協力なども得られている。

大阪府立大学とも、教育推進課から2名の教員を紹介され、機関連携として「イノベティブシンキング」等において協働して授業づくりに取り組んでいる。

## (2) ICT 活用の推進

拠点校、共同実施校の「情報」の授業に対して、高校在籍の授業者に加えて大阪教育大学の情報専任教員を派遣し、両校のカリキュラムの改善・充実にあつた。また、授業生徒は一人1台のPCを所有しており、各プログラムで活用している。

## (3) 「エンパワメントプログラム」

高い英語活用力を習得するため、外国人大学生（大学院生）とのワークショップ形式の研修に拠点校12名、共同実施校7名のほか、連携校の生徒が参加した（夏季休業中5日間。（株）ISA主催）。

## i【研究開発・実践】留学生の受入の学校体制

### (1) アジア高校生架け橋プロジェクト留学生（拠点校）

拠点校のPTAやAFSと連携し留学生2名のホームステイ先を確保し、すべての教育活動に参加できる環境を整備・支援した。また、大阪教育大学や大阪大学の留学生とZoomを介して定期的に話す機会も提供した。「グローバル探究」や「グローバル探究プラス」「高校生国際会議」に参画した。なお、近畿圏の本プロジェクト留学生に「高校生国際会議」への参加を呼びかけたところ、拠点校2名の他、京都府、大阪府から10名が参加した。

### (2) 「多文化理解講座」（拠点校）

大阪教育大学の教員研修留学生4名が拠点校教員と連携し、各国の社会・文化・教育等に関するテーマについてのグループ単位でのワークショップ（ディスカッションとプレゼンテーション）を、1、2年全員に対してそれぞれ実施した（1年全員：9月17日 2年全員：11月20日）

大阪教育大学グローバルセンターとの事前打ち合わせを充実させたことにより、実施後の生徒対象アンケートの結果が「積極的に交流に参加した」84%、「交流を通して外国の社会、文化等に興味を持てた」99%、「英語の学習への意欲が増した」91%になるなど、昨年度より生徒の自己評価が高くなった。

### (3) 「Lunch Time Chat」（拠点校・共同実施校）

10月～12月の平日12:40～13:15に、大阪教育大学、大阪大学、拠点校、共同実施校をオンラインでつなぎ、留学生と高校生が英語で意見交換等を行った。

- ・留学生1名と生徒3～4名が話し合う形式で実施した。合計30回実施し、拠点校13人（延べ50人）、共同実施校6人（延べ22人）の生徒が参加した。
- ・実施後の生徒対象アンケートによると、「他国について新しい事柄を知ることができた」100%、「英語で話すのは楽しい」100%、「英語学習への意欲が高まった」89%であった。担当した留学生から、事前にトピックスを共有する必要性についての意見があり、来年度の課題である。

## j【研究開発・実践】特筆すべき点

### (1) 「課題研究教員研修会」（拠点校）

11月6日に、拠点校が「課題研究教員研修会」を開催し、「グローバル探究」等の指導方法などをオンラインで発表した（本年度で7年目）。全国の教育関係者41名が参加した。

発表内容：「グローバル探究のカリキュラムと教材」「グローバル探究の生徒の研究発表（動

画)」「イノベティブシンキングのカリキュラム」「グローバル探究プラスと高校生国際会議」「大阪教育大学WWL事業及び拠点校(2年次)の取組」

実施後の参加者対象アンケートによると、4択のうちの肯定的回答(①そう思う、②どちらかと言えばそう思う)が、(ア)の発表は「課題研究の指導に役立つ」、「次回もこのような発表を聞きたい」はいずれも①71%、②29%であった。記述意見として「先進的で体系的な取組みであった。イノベーションに関する指導は探究的な学びに重要と思う」「生徒の研究発表の完成度に驚いた」「WWLにおける連携の構想や評価について大変参考になった」などがあった。

## (2) オンラインによる「グローバルスタディ」(拠点校)

諸外国の社会課題やSDGsに向けた取組を学ぶことを目的とし、5ヶ国とオンラインでつなぎ、下記のテーマで講義聴講と意見交換を行った(講師は現地のNPO法人や一般社団法人等の専門家や実業家)。

- ・10月8日 拠点校1年生全員 インド(児童労働問題)、カンボジア(学校教育の課題と取組)、フィリピン(貧困の現状と取組)、ニュージーランド(自然環境の維持活動)
- ・2月11日 拠点校希望生徒と連携校(大阪府立泉北高校、大阪府立住吉高校、沖縄県立那覇国際高校)生徒27人が参加(のべ42人参加)。インド(貧困層児童が通う学校運営と教育課題)、カンボジア(ゴミ問題への取組と循環社会)、オーストラリア(現地中高生のSDGsの取組)。
- ・3月10日 ニュージーランド研修の代替プログラムとして実施  
実施後のアンケートでは、本プログラムで「各国の社会問題に関心をもった(100%)」「現地の人とのさらに交流したい(82%)」「国際協力に関心を持った(64%)」などであった。また、「海外とライブでつながることが初めて(73%)」であった。

## (3) 大阪府立大学「高校生起業家教育講座」(拠点校)

イノベティブ・マインドを学ぶため、7月~8月の講座(6回)に拠点校の1年6名が参加した。ワークショップで実施された講義内容を、後日、上記「グローバル探究プラス」の生徒間で共有した。

## (4) 「評価指針の開発~非認知能力を高める学び(探究)の実践~」(共同実施校)

11月20日に、共同実施校の教員全員を対象に「評価指針の開発~非認知能力を高める学び(探究)の実践~」と題したワークショップを実施した(講師:大阪教育大学の仲矢教授)このワークショップにはオンラインで学外から43名が参加した。

数名でラウンドテーブルディスカッションを行い、それを別の数名がルーブリックを使って評価するワークショップを通して、非認知能力について適切な評価を行うには、評価者自身の非認知能力を高めることが必要であることを学んだ。

## (5) 大阪教育大学における学部生対象授業「探究型学習の実践と研究」(管理機関)

WWL事業のテーマである「学びの共同体の構築」の主体の一部には、未来の教員である学部生や大学院生も含まれている。教員養成系単科大学である本学の特性を生かし、附属高等学校で展開されている探究型学習の実践について学ぶ学部生対象の教養基礎科目『探究型学習の実践と研究』(2単位)を展開した。

授業の到達目標は、『探究型学習の先行的実践例を通して、その方法を理解し、思考力、判断力、表現力を養ううえで類似する学習方法との違いと有用性を探究する。』である。

大阪教育大学附属高等学校三校舎の副校長及び事業担当者らによる講義を通して探究型学習の基本について学んだ後、附属高等学校で行われている実践例を見学し、探究型学習をデザインするために必要な要件を考究した。附属高等学校各校舎(天王寺校舎、池田校舎、平野校舎)で行う授業見学を期間内の平日または土曜日に複数回設定した。

令和3年度の受講生17名は、それぞれに受講に至る動機が明確であり、附属高等学校(天王寺校舎、池田校舎、平野校舎)における探究型学習の授業参観にも意欲的に参加した。成

果発表のプレゼンテーション及びレポートからは、新しく発見できたことや、疑問に思ったことを整理するにとどまらず、受講生自身の高等学校における学びの経験との比較などを通して実践例との共通点や相違点を考察していた。

令和4年度以降も、引き続き教養基礎科目として開講し、大阪教育大学副専攻プログラム（STEAM教育を中心とした教科横断型教育プログラム）の一環として位置付ける。

#### (6) 大阪教育大学連合教職大学院科目「他地域教育実践演習Ⅱ」（管理機関）

受講している大学院生が、台湾国立高雄師範大学附属中学と1月14日にオンラインによる美術の授業を実施した。その際、拠点校である平野校舎の生徒が大学院生と協働して教材を作成し、クイズなどを交えて日本（大阪）を紹介した。

### 8 目標の進捗状況，成果，評価

#### a イノベーティブなグローバル人材の育成状況

拠点校では、平成27年度～令和元年度までスーパーグローバルハイスクール指定校として取り組んだ際、以下に示すA～D、4つの力の習得を目指した。

A. 課題解決力	多面的思考力 論理的思考力 批判的思考力 情報収集分析力 計画立案力
B. コミュニケーション力	質問力 受容力 外国語運用力
C. 多文化理解力	多面的思考力 自文化理解力 他文化理解力
D. セルフマネジメント力	ストレスコーピング ストレスマネジメント

本事業では、「イノベーティブなグローバル人材」を育成するため、表に示す【資質・能力】，【心構えや考え方，価値観等のマインドセット】，【探究スキル】を習得させるカリキュラムを開発・実施している。これは、上述のSGHの成果検証を踏まえるとともに、『OECD教育2030』で議論され、将来の人材に必要とされているコンピテンシーをベースにして設定したものである。

(表 WWL事業で育成を目指す【資質・能力】等)

【資質・能力】	
a	新しい価値を創造する力： 課題設定・再設定の力，創造的思考力，協働力，適応力，好奇心
b	対立やジレンマを克服する力： コミュニケーション力，企画立案及び実行力，多文化理解力
c	責任ある行動をとる力： やりぬく力，ストレスから回復する力，セルフマネジメント力
【心構えや考え方，価値観等のマインドセット】	
d	既存の知識の枠組みにとらわれず，自由な発想で柔軟に物事を捉えようとする心構え
e	課題に関する，多面的かつ批判的な考え方や偏見の無い価値観
f	課題解決に向けた主体的な行動
【探究スキル】	
g	データに基づいて議論することができ，データを活用して課題を解決できる

h	文理融合的アプローチによって、多様な解決方法を発想・試行し、総合的に探究できる。
---	------------------------------------------

S G Hの成果検証では、グローバル人材のジェネリックスキル指標 (PROG-H) を活用するとともに、平野校舎独自の評価尺度 (G-PAD) を開発した。参考資料として、以下に PROG-H におけるリテラシー及びコンピテンシーを示す。

(参考資料：PROG-H ジェネリックスキル指標)

PROG-H ジェネリックスキル指標の内容		
<b>【リテラシー構成：4カ】 OECDにおける能力区分（学力やスキル）</b>		
①情報収集力		確実な情報を収集するスキル
②情報分析力		情報から現状を把握するスキル
③課題発見力		幅広い視点で現象を捉え、考察し、課題を発見するスキル
④構想力		課題解決を実現にむけて計画するスキル
<b>【コンピテンシー構成：9カ】</b>		
対人基礎力	⑤親和力	信頼関係を構築する人間性
	⑥協働力	課題を協力して取り組む人間性
	⑦統率力	建設的な議論を進める人間性
對自己基礎力	⑧感情制御力	自己の感情を制御
	⑨自信創出力	自信を向上させる人間性
	⑩行動持続力	責任感をもち取り組む人間性
対課題基礎力	⑪課題発見力	解決すべき課題を見つけ向き合う人間性
	⑫計画立案力	効果的な計画を構築
	⑬実践力	自ら行動する人間性

本事業で目指す人材育成の成果尺度の開発は、GIER 委員会のアセスメントグループを中心に検討を進めている。参考資料の PROG-H は、S G Hにおける調査結果との継続性が担保されるため引き続き活用するが、PROG-H の項目では測定できない「イノベティブ」な力を分析するため、先行研究等のサーベイを踏まえ、創造性が実施される過程に着目し、創造性発揮のプロセスをどの程度実施できるのかを測定することに重点をおき、新たに開発を行った。OECD ラーニングコンパス 2030 で提唱された AAR サイクル(【Anticipation (予測) -Action (実行) -Reflection (振り返り) (AAR) Cycle】)の枠組みをもとに、設問を作成して拠点校及び共同実施校である附属高校平野校舎、池田校舎、天王寺校舎の生徒対象に、調査研究を行い、探索的因子分析を実施し、因子構造を得た。AAR サイクルに関する新規尺度として3因子 9 項目の尺度として構成することができた。また信頼性については、Anticipation 因子で  $\alpha = 0.91$ 、Action 因子で  $\alpha = 0.89$ 、Reflection 因子で  $\alpha = 0.85$  となっており、十分に高い信頼性が得られた。

次年度以降、今回新たに開発した尺度を用い、広く評価分析を実施する。

### **b ALネットワークが果たした役割等**

ALネットワークは、拠点校及び共同実施校、国内外の連携校、協働大学、協働機関が参加しており、多様な立場から多様な観点での情報共有ができることが分かった。例えば、ALネットワーク会議で課題研究等の進め方に関する各校の工夫等について、短い時間であったが意見交換し報告されることで、学校間のみならず、大学等の連携機関と共有できたことは大変意義深いと考えている。また、それを受けての連携機関からのコメントも今後の活動に有意義なものがあり、学校側も改めて活動の意義を確認する場となった。もちろん、ALネットワーク会議の場以外でも、連携機関からの各種情報提供もこのネットワークを介して行われていることから、学校以外との連携実施に有意義なものであると確認された。今後、さらに課題・状況・情報の共有・活用に努めたい。

### **c 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況等**

目標の達成に向けて、継続的に活動を展開する計画である。

## 9 次年度以降の課題及び改善点

### **(1) 本事業に関する管理機関の課題や改善点について**

令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、管理機関内においても対面による会議は実施できなかった。そのためオンラインで代替したが、全体的な意思疎通を確認しながらの展開は必ずしも十分ではなかった。令和3年度は、少人数による作業グループや感染対策に配慮した対面式の打ち合わせ等を一部組み合わせることで、綿密なコミュニケーションを図り、共通認識のもとで事業を展開した。令和4年度についても、引き続きオンラインによる会議や打ち合わせのメリットを活かした上で、対面式を取り入れたハイブリッドによる情報共有に努めていきたい。

### **(2) ALネットワークの課題や改善点について**

ALネットワークを構築している参加機関の増加については、令和2年度に引き続いての課題である。今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響が残る中、十分な啓発活動が展開できなかった。令和4年度は、本事業における取組を紹介するパンフレットの配布・活用を含め、広報活動に注力したい。次年度は、啓発ツールを活用し、国内外の連携校や連携団体等の増加に向けて尽力したい。

また、ALネットワークで情報共有のためのプラットフォームを構築したが、効果的に活用できたとは言いがたかった点も引き続きの課題である。アプリケーション開発担当者と連携しながら、有効なツールとしての改善を図る。

### **(3) 研究開発にかかる課題や改善点について**

令和3年度については、令和2年度の状況に鑑みて、新型コロナウイルス感染拡大による措置（学級閉鎖・学年閉鎖等）もあり得るという想定に基づき、計画している事業の効果が最大限になるであろう代替プログラムの検討を早期に開始した。可能な限り、申請したプランに則った事業展開を模索した結果、拠点校・共同実施校ともに年度後半に集中する結果となった。どの時点で代替措置に切り替えるのか、複数の判断材料に基づいて意思決定する必要があり、次年度以降も引き続きの課題と考える。

今年度は、一部対面を残した形のハイブリッド型で実施した高校生国際会議であるが、あらゆる状況を想定したうえで最も教育的効果が高くなる展開方法の模索は次年度以降も課題である。その実現に向けて、具体的な年間計画を立てるとともに担当者間で視覚化する。

**【担当者】**

担当課	学術部附属学校課	T E L	072-978-4016
氏 名	上田 瑞美	F A X	072-978-3262
職 名	係長	E-mail	fuzoku@cc.osaka-kyoiku.ac.jp